

# 山びこ通信

しぜん イタリア語 ラテン語 ウェブプログラミング  
 歴史 ギリシャ語 かいが 調査研究 理科 数学  
 ことば つくる ユークリッド幾何 山の学校ゼミ(社会/数学)  
 英語 かず フランス語 ロボット工作 漢文 ロシア語

秋  
学期号

## Ipse dixit. 子曰わく

山下太郎

表題の ipse dixit. (イプセ・ディークシト) は「彼自身がそう言った」という意味のラテン語である。元はギリシャ語であるが、二千年前のローマの文人キケローがラテン語で引用して以来、「権威に依拠した独断的断定」(英語で ipsedixitism ともいう) を戒める言葉として人口に膾炙するようになった。

事の次第は後でふれるとして、この言葉が『ギリシア・ローマ名言集』(柳沼重剛著、岩波文庫)において、「子曰わく」と訳されている点に注目したい。うまい訳だと唸らざるを得ない。と同時に、東西文化の相違に思いを寄せずにいられない。表題のラテン語と日本語訳について気づくことを述べたいと思う。

まず、ここで再び Ipse dixit. に戻ると、これはキケローの『神々の本性について』に見られる言葉である。キケローはこの書において、三人の話者を登場させ、神々を巡る諸問題——神々はいるのかいないのか、いるとすればどのような姿形をしていて、どこに住んでいるのか、等——について議論させる(全三巻)。正確に言えば、一人目と二人目は自説を述べ、三人目は両者の説を反駁する。この書の序において、キケローはあるべき議論の姿に言及し、次のように語っている。

議論を行うさいには、権威よりも理論の説得力こそ求められるべきである。じじつ、我こそは教える資格ありと公言する者の権威などは、何かを学ぼうとする人間にとてしばしば害をなす。なぜなら、学ぼうとする者は、やがてみずから判断することをやめ、自分が正しいと是認した人の判断をすべて鵜呑みにするようになるからである。それゆえ、わたしはピュータゴラース派について耳にする風評をとうてい是認する気持ちにはなれない。すなわち、かれらは論争で何かを主張するさい、その論拠を尋ねられると、決まって「かの人自身がそう言ったから」と返答するのがつねであったと言われている。「かの人」とは他ならぬピュータゴラースのことであった。このようにピュータゴラース派のあいだでは、論拠もないままに一つの権威が絶対的な力をもつほどに先入観が支配的であったのだ。

(『神々の本性について』 1.5、山下太郎訳、岩波書店)

表題の Ipse dixit. の訳は下線の部分である。文脈上、主語はピュータゴラース(ピタゴラス)派の師を指すので、「先生がそう仰った」と訳してもよい。まさしく「子曰わく」である。キケローによれば、この学派の人間は、議論の論拠を求められるときまてこの言葉を口にした。「だって先生がそう言われたんだから

(正しいに決まっている)」というニュアンスになる。

と、ここまで書いてきて、気づくのである。今見たように、西洋では「それではいけない」という意味で *Ipse dixit.* が引用されるのに対し、東洋の伝統はその逆である。「子曰わく」の表現は、孔子の言葉を紹介する枕詞として、常に心からの尊敬と信頼を込めて発せられてきた（簡野道明の『論語解義』を見ると、孔子の発言には「のたまわく」、弟子の発言には「いわく」とルビがふられている）。

もちろん、それぞれの文脈が異なるので単純な比較は禁物である。ただ、前者が「先生が言ったかどうかでは大事ではない（=あなた自身の判断が肝心）」というメッセージを与えるのに対し、後者は「先生が大事なことを言われた（=ありがたく受け止めなさい）」と意訳できる点で、両者は対照的に見える。

日本人はこれまで何万回、否何億回「子曰わく」と唱えてきたのだろう。儒学の影響は戦後弱まったとされるが、それでも今なお私たちの心に影響を与えている。日本の社会秩序の安定は、儒学の教えと無縁ではないとも言われる。だが、他方において、もしこの精神風土が「権威への盲信」という一面を助長する可能性を持つものなら、それは民主主義国家にとって致命的欠点となる。

それではいけない、ということで、教育は本来「自ら学び、自ら考える人間」を育てることを目標に掲げるが、今の日本は国家が箸の上げ下げまで教育に介入している。生徒にとってイプセとは「先生」、学校の先生にとっては「文科省」がイプセである。イプセ自身はいつも絶対に「正しい」。だが、この関係は学問の自由を脅かす危険性をはらむだろう。なぜなら、「学ぼう（or 教えよう）とする者は、やがてみずから判断することをやめ、自分が正しいと是認した人間の判断をすべて鵜呑みにするようになる」からだ。

では、現状をどう打開するのか。問題の解決は国任せでなく、個人単位で考えるのが一番早い。それには読書。それには議論。日本で「議論」というと「言葉のボクシング」のイメージを持つ人が多い。この点、キケローの著作（『神々の本性について』）は示唆的である。彼は自らの立場を「真理を探究する目的から、すべての哲学者たちの見解にたいし批判も擁護も行うことを信条とする」（同 1.11）と規定する。自身の代弁者となる登場人物コッタは、先行する二人（エピケーロス派のウェッレイウスとストア派のバルブス）の意見を鋭く批判する。印象深いのはこの作品の最後の描き方である（キケロー自身、この作品には議論の聞き役として参加）。

これらのことと語り終えて、わたしたちは帰路についた。ウェッレイウスはコッタの議論が真実に近いと感じていたし、わたしにはバルブスのそれが真実の姿のかなり近くにあるように思われた。（同 3.95）

何気なく見えるが、これがどれだけ意味深長な表現であるか、おわかり頂けるだろうか。キケローは、コッタでなくバルブスに一票を投じているのだ。それに対し、どんなテーマでもよい、現代の諸問題をめぐる対立した意見に耳を傾けてみよう。それぞれの論者は、基本的に自説の正当性を信じて疑わず、対立する立場の意見には耳を傾けない。非難とヤジの応酬は国会の日常風景でもある。だが、キケローの描いた神々をめぐる論争は違う。ここで内容紹介を行う余裕はないが、少なくとも、議論の入り口と出口とで、自分も含めた参加者の意見が「変わり得る」ことが示されている。

*Ipse dixit.* は、別の訳し方をすれば、「あいつが言った（=だから間違い）」ということでもある。内容の是非でなく、誰の発言かが判断の基準になる。対立するグループの言説は、ただ相手が味方ではないという理由だけで、すべてを否定し非難する。本来は違うはずだ。ここまでわかる。ここからが違う、と緻密に線引きを繰り返しながら、参加者全員が一致協力して議論を積み上げていく。健全な批判精神が發揮される限り、異なる立場を乗り越えて、人々はより真理に近づこうとする努力を共有できる。キケローの作品が訴えるのはこのことである。（巻末へ続きます）

ひみつ基地づくりの計画を進めてきた、A(火曜日) クラス。

ところが、いざ現場に来ると、おもしろいキノコや虫を見つけて観察したり、大量のクヌギやどんぐりが落ちているのを見つけ、木の実集めに転じたり…。基地計画は、なかなか進行しません(苦笑)。よしやるぞ!と、各自が拾った丈夫そうな木の枝を1、2本ずつ手にしてから現場にやって来たときも、ひとたびそれらをのこぎりで切り始めると、一心不乱に切り続け、「最後まで枝を分断し切ること」自体が、いつしか目的へと変わっていきます。しぜんクラスでは、こうしたシーンを幾度となく目にしてきました。

「もし、一度決めた計画を遂行できなければ、みんなにとって、よき学びにならないのではないか」という考えもよぎります。私自身、自問自答を繰り返しながら活動を見守っているところですが、上記のような「寄り道」をしているときの、みんなの目の輝きを見ているうち、必ずしも完成にこだわらなくてもよいのではないかと考えるようになりました。(「ひみつの森」と呼んでいるこの森自体が、みんなにとってのひみつ基地なのだ、と思われる瞬間があります。)

また、学年も性格もバラバラの仲間たち、特に低~中学年は、元気さ余って自分本位に行動してしまうこともしばしばですが、まとまるときは、瞬時にまとまってくれます。そうした彼らの可能性を、最後まで信じたいと思います。

誤解を恐れずに言えば、今のみんなにとって必要なのは、しぜんの中で、有り余る程の元気を解放し、思いっきり遊ぶことです。そして、どのようにしたら楽しい遊びとなるか、一生懸命工夫し、話し合うことです。思いやりと絆を深めていけるよう、それとなく導けたらと考えています。

B(木曜日) クラスについても、ほぼ同じことが当てはまり、各自の提案から生まれた「遊び」を共有し、心ゆくまで楽しんでいます。室内では、森で拾った材料を使った木工作。屋外では、園庭と、「ひみつの庭」(7月に竣工したビオトープガーデン)を散策しながら、様々なきものを見つけて観察したり、青空の下で黙々と絵を描いたり、「えんぴつ作り」と称してひたすら木の枝の皮をナイフで削ったり…。

あるときは、クローバーの広場で、リボンの形そっくりに虫食いされた葉っぱが見つかりました。またあるとき、Rちゃんが描いていた鉄柱(鯉のぼり等を掲げる大変背の高いもの)の遙か先端にトンボがとまっているのを発見し、

みんなで喜びました。

そんな、奇跡のような無数の瞬間を、秋学期もみんなと積み重ねています。

バッタ、トンボ、カラスアゲハ、キアゲハ、キボシカミキリ、ヤゴ、メダカ、オタマジャクシ、カエル、アカハライモリ…。例えば1回のクラスだけでも、これだけ数多くの出会いがあります。葉っぱ愛好家のRちゃんの影響か、Ha君、色々な形をした葉っぱの面白さに気づき始めました。



のこぎりを使う1年生。支える仲間たち。



森から帰ってくると、きまってここから夕焼けを眺めます。



森を抜け、斜面を下りて沢へ行った日。「サワガニ見つけたぞ!」と叫ぶS君を筆頭に、一同、沢蟹探し大会に。結局、Aちゃんが見つけた一番大きい沢蟹を教室に連れて帰ることに。その後、どうすればよいか、みんなに考えてもらいました。「教室で飼いたい!」「でも、そうするとクラスのない2週間はセンセイが育てていることになってしまうよ?」私が問うと、みんなはジャンケンし、順番に家で育てるようになりました。



両クラスとも、夏休み前に仕込んだ梅ジュースで乾杯をしました。



3



## ● しぜんの中に、道具を発見しよう。

身近にある自然の中から、絵を描く道具を発見する。或は発見した素材を加工して道具をつくる。

この取り組みは三年前にも行ったもので、当時体験した生徒（現在5年生）からのリクエストもあり、この度続編として実施しました。（2010年秋学期号の記事も是非、ウェブ版バックナンバーからご覧下さい。）

まず、教室の外に出て、木の枝や小石、葉っぱなど、道具として使えそうなものを集めてもらうところから始めるのが基本ですが、今回は新たなアプローチを試みました。絵画の道具として代表格の一つである筆（毛筆）。これを作つてみようとした提案なのです。そこには幾つかの経緯があります。一つは、三年前の経験で、生み出される道具が概ね「ペン型」か「ハンコ型」になることが予想されたこと（勿論、それらだけでも十分楽しめます）。

もう一つは、私自身が「ある筆」を初めて使つたとき「面白い！」と感じたこと。そして、その筆に近いものを自作できたとき「おお～！」と嬉しくなったこと。その筆とは、軸から穂先まで全て竹でできている「竹筆」というものです。

さて、筆と言えば、獣毛でできたものが一般的ですが、クラスの時間に自分たちでそれを手に入れることは困難です。しかし、竹ならこの山の上に沢山あります！クラスでは度々、筆が命を持った道具であることに触れ、道具の大切さを伝えてきましたが、竹はみんなに、そのことをより深く体験的に伝えてくれるに違いありません。また、みんなだけでは思いつくことが少々難しいと思われる加工の工程も経るため、素材との関わりは積極性を増し、多くの試行錯誤が必然的に生まれます。そのことは、絵画という現象の物質的側面に対する意識を、理屈ではなく、感覚的に促してくれるはずです。理想の表現を追求したり、そのための道具を自分で考えたり、偶然に面白い道具と表現に出くわしたり。こうしたプロセスこそ楽しく、大切です。工夫する心、柔軟な姿勢。かいがクラスを通して伝え続けていきたいエッセンスが、このシンプルな課題には、ぎゅっと詰め込まれています。

年度末（3月後半予定）の「かいがクラス作品展」で、クラスの仲間たちが楽しんだ軌跡を是非ご覧下さい。

十人十色の  
道具と工夫



堅い繊維を細かく解した部分が、絵の具や水分を含む穂の役割をします。上が既製品（1500円）。下が自作竹筆の例（I作／プライスレス！）。素材を選び、切り出し、削り、叩いて育てる。匠たちの真剣な眼差し。



トントンギコギコ、匠たちが、大小様々な筆やペンを開発しては効果の検証を重ねます。

様々な道具による表現を重ね合わせたり、逆に1本の筆で、様々なタッチを生み出したり。葉っぱや、竹の断面でスタンピングしたり。長さ50センチのしなる筆で、スパッタリングしたり、カラタチのトゲを使って、極細の線を編み出したり……！

# 『つくる』(A・B) 『ロボット工作』 担当 福西亮馬



『つくる』は、Aクラスではダンボールや紙箱をよく使いました。1年生のYk君は、仮面ライダーのコスチュームを実現できたことが相当嬉しかったらしく、それを着ながら家まで帰っていました。次の日、お家の反応について尋ねると、「お仕事から帰ってきたお父さんにさっそく見せて、さっそく誉めてもらって、嬉しかった」とのことでした。案の定、お家でたっぷり栄養を吸ったYk君は、「次は設計図描いてくる！」と言って、本当に戦車の絵を描いてくれたことがあります。(その設計図をもとに作ってくれているのが左上の写真です)。そういう反応が、私も過去の自分を重ね見るようで、嬉しいと感じました。

Bクラスでは、ロケットを飛ばした後の展開で、ゴムを飛ばす割りばし鉄砲を各自制作中です。3年生以上の生徒



は、過去に何度か作った経験がありますが、はじめての人はオーソドックスなものに、それを作ったことのある人は、スライド機構（ゴムを引っかける所）のついた連発式に挑戦です。これはギザギザ部分を作るのにとても苦労しました。この稿を書いている時にはまだ作りかけですが、山びこ通信が届く頃には、完成していればいいなと思います。またその時に、たまたま2年生のYt君がお家でお父さんとレゴで作った筒型の鉄砲を持って来て、披露してくれたことがあります。Yt君は、その仕組みを割りばしでもまねて作れないかと、何時間も試行錯誤を重ねていました。割りばしをひとまず板状にして、それを四面に貼り付けるという大変な作業を、一生懸命乗り越えようとして無心になっている姿に、私も心を動かされました。



さて、中学・高校生クラスの『ロボット工作』では、無線でロボットカーを動かすことに挑戦しています。手頃な無線モジュールがあり、それで簡単に実現できるかと思いきや、動作電圧の違いという点で苦労しました。そこが勉強になりました。これまで5Vマイコンを使い、モータードライバーも5V用で自作していたのですが、無線モジュールは3.3V用だったのです。また無線モジュールは負理論(0Vでオン)で、モータードライバーは正理論(5Vでオン)。そのような部品を組み合わせて使うには、電圧の違いをうまく翻訳する必要があります。その問題を、手持ちの部品だけでどうにかクリアできたことには、達成感がありました。

この時、「6年生の時に（ロボット工作的イベントで）作ったキャタピラの一輪車も無線化できますか？」と質問したのはR君でした。「もちろんできるから、今度持ってきておいで」と答えると、R君の表情がぱっと明るくなりました。モーター2つが動いたのなら、1つも当然動くわけですが、R君にとっては、6年生の頃に「そうしたい」と思っていたことが今やっと実現した、という意味があるのでした。私もR君が6年生の時のことを思い出し、一緒になって喜びました。

(福西亮馬)

## 『ことば』(2年)『調査研究入門』

担当 浅野直樹

辞書と仲良くなることが言葉を思い通りに使うための大きな一歩です。知らない語を調べるのは当然として、だいたいの意味はわかるけれどもしつくりこないというときに辞書を引くと思わぬ発見があつたりします。

そのような辞書の使い方を調査研究入門のクラスで発表に向けた原稿をまとめているときになりました。先行研究に依拠しつつ、従来型の小説は現実を、ライトノベルは虚構を、ケータイ小説は理想をそれぞれ描写したものだと論じる予定なので、「現実」、「虚構」、「理想」という語を辞書で引くことにしました。すると、「現実」の対義語は何かという疑問が生じました。「虚構」も「理想」も「現実」の対義語だと言ってよいでしょう。また、この三者に対して、「客観」、「傍観」、「主観」を対応させようとしています。「客観」と「主観」は対義語ですが、そこに「傍観」が入っているのがおもしろいです。

このように自信がないときや気になったときには面倒がらず辞書を引いてみようと思えることが大切です。そう思えるためには辞書に対してよいイメージを持っていることが前提になります。小2ことばクラスでは生徒たちが辞書を好きになってくれているように感じます。というのも、クロスワードをしているときに辞書を手渡して使ってみると勧めると、最初は半信半疑だったのが、調べたい語を発見するにつれて辞書の偉大さを知るようになったからです。小さな国語辞典よりも大きな広辞苑のほうが好きだと言う生徒まで現れました。私の使っていた電子辞書にも興味津々で、それを使うためにローマ字入力の一覧表を作ってくれと言われたほどでした。

辞書を活用すれば大きな力になります。そのためのお手伝いができればと思っております。

(浅野直樹)

## 『ことば』(4年・5年)

担当 高木彬

前号の『山びこ通信』では俳句づくりのことを主にお伝えしました。そこでも予告しましたように、現在、私の担当することばクラスでは、俳句づくりに加えて、ミヒヤエル・エンデ作『ジム・ボタンの機関車大旅行』(上田真而子訳、岩波書店)をこつこつ読み進めています。フクラム国という小さな島国に届いた謎の赤ん坊が、ジムと名づけられて少年となり、機関士ルーカスや機関車エマとともに海の向こうへ冒険に出かける。たくさんの不思議や驚きが散りばめられた宝石箱のような物語です。この物語は冒険譚なので、物語の筋がそのまま冒険の道筋と重なります。だからでしょうか、結構分厚い本なのですが、あまり複雑な文脈を追わなくても読み進められます。生徒さんたちも気負わずに、毎回読むのを楽しみにしてくれています。まるで自分たちも機関車エマに乗って大旅行をしているかのように。

また、合わせて物語の創作にも取り組んでいます。『ジム・ボタン』は、創作の刺激になるようなアイデアにあふれたファンタジーです。それを栄養としながら、こちらもやはりこつこつと、書き進めています。いつ終わるとも知れない長大な物語が生まれつつありますが、その完成した内容については、続報をお待ちください。

また、秋学期からは、これまでの金曜日クラスに加え、新たに火曜日クラスが誕生し、私が担当させていただくことになりました。こちらはいまのところ4年生のY君とのマンツーマンです。しぜんクラスなどで「虫博士」として有名な、あのY君です。昨年度までは私もしぜんクラス担当の一人として、昆虫のことをはじめ、Y君からたくさんのことをお教わりました。今年はこういうかたちで再会できて、とても嬉しいです。

Y君のクラスでは、まずは詩の朗読をしています。意味の読み解きは後まわしにして、声を出して読みます。代わる代わる順番に読んだり、二人で声を揃えて読んだりといったことを、時間をかけて繰り返します。さて、いったい何のためだと思われますか？おそらく進学塾ではあまりこういうことはしないでしょう。すぐにはテストの点数に結びつかないからです。しかし、こうして朗読しているうちに、身体が、言葉の持つ音とリズムになじんでいくのが分かります。それは歌を歌う心地よさに似ています。頭が詩の意味を理解するよりも前に、身体に詩が勝手に浸透してくる。一緒に歌を歌えばそれだけでどこなく気持ちが通じるものですが、同じように、詩と一緒に朗読することは、一種の身体的なコミュニケーションもあります。クラスの初めにY君と二人で朗読する時間は格別です。だんだんと心が静まり、ことばの世界に浸る準備が整います。いつもそこから『ジム・ボタン』を読み始めます。

こうして身体が言葉になじめば、こちらが強要しなくとも、自ずと詩の意味にも興味がわき、自分で考えたくなるはずです。もちろん、要所要所で導きの手は必要ですが、少なくとも、こちらが教え込んだ詩の意味を丸暗記するような不毛な作業にはなりません。反対に、最初から詩の意味を謎解きのように細かに講釈してしまうと、詩が、なんとなく疎ましく煩わしく感じられて、次第に心は離れていくてしまうのです。あまり口出しせず、ただシンプルに一緒に朗読し続けること。時間はかかりますが、これが詩の言葉と親しむ最良の道です。その道の先には、きっと将来の本好きの自分がいるはずです。

ある日、いつものように詩の朗読を終えると、Y君が「でも、どうして人間は体が黒くならないのかなあ？」とたずねました。「人間はいろんなものを食べるから、色が混ざって黒くなるはずなのに」。その日は、金子みすゞの「不思議」を朗読していました。第2連には「私は不思議でたまらない、／青い桑の葉たべている、／蚕が白くなることが。」とあります。おそらくY君はここに反応して、頭のなかで「どうしてなんだろう」と考えてくれていたのでしょう。私はそのとき心のなかで「しめた」と思いました。Y君が「虫博士」であることを想定してこの詩を選んでいたからです。



そして、こういうときに私が肝に銘じていることは、大人の知識で安易に「正解」を与えてしまわない、ということです。彼の「どうして」という探究心を、それっきりにさせないためにです。だから代わりに、「アゲハチョウの幼虫の場合はどうかな?」とたずねておきました。この瞬間が、将来の探求と読書の種の一粒になることを願って。

(高木 彬)

## 『ことば』(6年)

担当 福西亮馬

去年度、高木先生が担当だった5年生のクラスの記事（「山びこ通信」2013年2月号 p13）を開けてみると、今このクラスに通っているY君が、当時も「やっぱりすごいよなあ」と、いつもの口癖で、一つ上の学年の生徒作品を手にして感嘆を洩らしていることが書かれています。一方、Kちゃんには、「夜空に輝く北極星のように、物語の航路を先導しています」とも記されています。高木先生曰く、『みんなで一つのお話を書き継ぎながら、自分の番で周りを「アッ」と言わせる、連歌にも似た愉しみ』——そのリレー小説を書いた時の楽しかった思い出を授業でも話してくれたことから、それを再開することにしました。

高木先生から原稿を借り受けた時のずっしりとした厚み。「これは大変なことだ」と思いました。しづかに、そっと、丁重に。それはまるでエンデの『はてしない物語』に出てくるヨルの雲母の地層のようであり、その「続き」を書くことには、彼らの思い出のひとコマが含まれているのだと思って、背筋がピンとなる思いがしました。

2作目となる今回は、以前登場したマウントとジョージという二人の少年の友情を機軸に、難事件を解決していく、という筋書きで始めています。(ちなみにマウントという名前は、山の学校の「山」から取られています)。設定や世界観もそのまま前作から引継ぎ、さらには以前に語られなかった部分にもスポットを当てていこうと相談中です。

Y君がさっそくインスピレーションが湧いたらしく、リレー執筆の一番手をやって出てくれました。その導入部分がなかなかよい書きっぷりで、「よし、それがいい。それでいこう!」とすぐにお互いの中で共通イメージができあがりました。Kちゃんも持ち前の丁寧さで話の糸を紡ぎ出し、航海のすべり出しは順調そのものです。その原稿をまたY君が受け取って……と、まるでバレーボールを見ているような阿吽の呼吸からは、一体どんな展開が飛び出すのか、今後も楽しみです。

残りの時間は、前学期から引き続き『モモ』を読んでいます。この稿を書いている時には、ちょうど半分まで差しかかりました。時間貯蓄銀行を名乗る灰色の男たちの正体が判明し、モモが亀に連れられてマイスター・ホラのいる「時間の家」にたどり着いたところです。

今、6年生の生徒たちと一緒にすごせるこの時間は、1週1週、日めくりのように感じられます。それは、Kちゃんがいつか2年生の時に書き残してくれた『なくなる落ち葉』の詩のようです。けれども、一つの物語が無事終わりを迎えることは、また楽しみなこともあります。残りの回の授業も『モモ』に出てくる道路掃除夫のベッポのように注力したいと思います。

(福西亮馬)

## 『かず』(1~5年)

担当 福西亮馬

今学期は「まちがい探し」や「足し算パズル」をしたあと、おはじきを使った「数当て」や「4目並べ」といった切り口で、数の感覚や論理性を磨いています。

最近では、300まで続く「すごろく」を用意しました。私の拙い手描きで、ところどころにドラえもんの秘密道具の絵を配しています。さて、3人の生徒がさいころを1つずつ持ち、「いっせーので」で振って合計を出します。それが1回に進める数です。単純ですが、これが1年生から5年生まで白熱しました。「秘密道具」の場所では、「もう1回振れる」というルールがさらに盛り上がりを見せました。

さて、「300にたどり着くまでに、いったい何ターンかかるか?」というのが、この日考えた問題でした。さいころは3つあります。そこで「最低値はいくらか?」というところから、まず考えていきました。というのも、以前「数当て」をした時に、3人が隠し持っているおはじきの合計が最大でも15のところで、「20」という予想が飛び出したことがあったからです。それで「本当にそのようなことが可能かどうか」ということを、肌で感じてもらうために取り入れたのが、今回のさいころでした。「3——だって、みんなが1を出した時が、一番合計が小さくなるから」と、1年生のS君も含めた全員が、最後には堂々と答えてくれました。

一方、5年生のY君はそれに長じて、最大値の18が出るのは、「さいころが1つなら、6が出るのは、6回に1回。2つなら $6 \times 6$ で、36回に1回。3つなら $6 \times 6 \times 6$ で、216回に1回」ということも突き止めてくれました。それは1年生のS君にはまだ難しい内容でしたが、Y君の説明に2年生のH君は、「なるほど、そうか」と合点していました。Y君は続けます。「それで、もし18ばかりが出たとしても、300を割ったら、だいたい16回。でもそれは、ほとんどありえない」と。こうしてY君は30ターンと予想し、H君は50ターン、S君は40ターンと見積もってくれました。

けれども、実際には「秘密道具」(5マスに1つの割合)に止まることもあるって、すでに13ターン目で198まで到達し、あと100ちょっとしかありません。そこで予想を下方修正する必要が出てきて、Y君は18ターン、H君は29ターン、S君は20ターンとしました。それでも3人ともはずれてしまい、25ターンという結果でした。「ああ!」と悔しそうなため息が何度も洩れました。しかしその間、生徒たちが何とか当てようとした努力は、「だいたい10か11のあたりが出やすい!」という経験則を生み出しました。そこでさいころの数をすべて記録したホワイトボードを眺めてみ

たところ、確かにそうなっていました。つまり、やってみて、数の感覚が掴めてきたというわけです。

理論は事実を裏付けることができます。ですがこうした実験もまた、時に理論を裏付けることができます。学校で習った計算法や、論理的思考を、自信を持って使えるようになってもらうためには、そうした「勘」をできるだけ養ってもらって、数の情緒や、論理的に考える楽しさが根付いていってほしいと願っています。

(福西亮馬)

## 『かず』（2年）『中学数学』『高校数学』 担当 浅野直樹

「繰り返し」の重要性に改めて気づかされました。

かず2年クラスでは通称「かいじゅうさん」（かいじゅうが配置されたマス以外のすべてのマスを通りスタートからゴールまで一本の道を作るパズルで、巡回パズルと呼ばれます）を何度もとなくしています。最初のうちは簡単な問題を勘に頼って解くばかりでしたが、今では理詰めである程度の道を作つてから試行錯誤をして完成させるというやり方に変わってきています。ある問題を一度解いてから数週間空けてまた解くといった具合に、まったく同じ問題に何度も挑戦しています。初回の挑戦ではこちらからかなりのヒントを出したけれども、3回目、4回目と繰り返すうちに、自分でできる領域が増え、ついには完全に自力で解けたということもありました。

中学数学や高校数学のクラスでも似たような現象が見られました。習いたての頃は応用問題がわからなかつたけれども何度かの復習を経た今では簡単に感じるといった感想がある生徒から聞かれましたし、この範囲の学習を3回も4回もやっているから今回はさすがに理解できるといった感想が別の生徒から聞かれました。

しかし闇雲に繰り返せばよいという話ではありません。単調な作業を繰り返すのは苦痛であり、効率的でもありません。根拠のない経験則ではありますが、パズルにせよ数学にせよ、一連のまとまりに挑戦することを繰り返し、少しづつできることを増やしていくというのが最も効果的であるように思われます。私がルービックキューブの練習をしていたときの例を出しますと、まずは一面とそのまわりをそろえられるようになり、次に一面とそのまわりをそろえた上で他の角をそろえることを目指し、そして最後に全部をそろえることに向かいました。この練習方法では一面とそのまわりをそろえるという最初の手順は何十回と行うことになり、一見非効率的ですが、その度ごとに達成感が得られてかつ土台を固めることにもなるので、結局は近道になると考えることができます。

繰り返しの練習をする背後には、その問題やパズルを解きたい、あるいは解けなくて悔しいという感情があります。その点に関して、学校のテストや模試でこの分野の問題ができなくて悔しかつたので家で繰り返し練習した、といった声が複数の生徒から聞かれたことをここに報告できることをうれしく思います。

(浅野直樹)

## 『かず』（5年A・B） 担当 高木彬

このクラスでは、前半30分で前学年の総復習に取り組んだ後、後半では「論理的に考えること」の練習をしています。これが算数・数学の根っこにあるものであり、算数・数学を学ぶ意義のひとつだからです。前号の『山びこ通信』では、論理的に考えるためには「頭のなかの目隠しに気づくこと」が大事だということを書きました。クラスで取り組んだ「9つの点」という問題についてご紹介したと記憶しています。今回は、その続きです。

またも突然ですが、こんなお話をご存じでしょうか。

一人の男が歩いていた。雨が降ってきた。男は帽子をかぶっていない。傘も持っていない。男は歩きつづけた。服がぬれてきた。靴もぬれてきた。しかし、男の髪はぬれていない。どうして？

不思議ですね。この男の髪はどうしてぬれないのでしょうか。「男が魔法を使ったから」というのは、それはそれで魅力的な答えですが、このクラスのテーマは「論理的に考えること」です。ここにはちゃんと筋の通った理屈があるのです。この問題に取り組む際のポイントは、出題者に何回でも質問していい、ということです。ただしその質問には、出題者は「イエス」か「ノー」でしか答えません。ということは、「ヒントを下さい」とか「答えは何ですか」といった質問（？）は、この二択で答えられないで無効になります。

さて、あなたならどんな質問をするでしょうか。実はこの問題は、質問の仕方のほうに、物事を順序立てて考える力が必要になってくるのです。最初は「風は吹いていましたか？」とか「雨は弱かったです？」といった当てずっぽうの質問で良いのです（どちらも「ノー」です）。とにかくたくさん質問します。そのうちに、だんだんと解答者が知っている情報が増えてきます。そして、どうやら「風」や「雨の強弱」といった、男の外側の条件は関係なさそうだということが分かってきます。したがって、たとえ暴風雨の中でも、男の髪はぬれない。このあたりで、次第に問題の核心が絞り込まれてきます。「手で頭を覆っていましたか？」「ノー」。「その服はレインコートでしたか？」「ノー」。つまり、なんにも頭を覆っていないのに、髪はぬれなかったということです。ここでR君が導き出した質問は、このようなものでした。「顔はぬれていましたか？」その質問には「イエス」と返事をしました。顔までぬれているのに、髪だけがぬれていらない、というところまで絞り込んだ結果、R君は直後に「あっ！」とひらめいて、答えにたどり着いたのです。

これをうけて、IちゃんとEちゃんも、次の質問をすることで答えを得ることができました。「その男にヒゲはありましたか？」おそらく、「顔はぬれて髪がぬれないのなら、じゃあヒゲは？」と考えたのだろうと思います。この質問についてはどうちらで返事しても良かったのですが、私は「ノー」と言いました。ヒゲはなかった。当然、ないものはねれませんね。さあ、もうおわかりでしょう。みんなが最後にした質問で、この問題の答えに代えたいと思います。「その男に髪はありましたか？」「ノー！」

以上から分かることは2つあります。1つは、論理的に考えるためには思い込みを解除する必要があるということ(これは前号すでに書きました)。髪がない人だってたくさんいるのです。そしてもう1つは、論理的に考えるためには想像力をはたらかせる必要があるということです。論理的に考えるということと、想像力をはたらかせるということは、しばしば別の領域のこととして扱われます。実際、純粋な論理、純粋な想像力というものは存在します。しかし、すでに上記の「雨の日の物語」と一緒に考えて下さったみなさんならおわかりのように、多くの現実的な問題においては、論理的に考えるということと想像力をはたらかせるということは、矛盾しません。それどころか、むしろそれらは補完しあっているのです。答えにたどり着くためには、髪がぬれないヘンテコな男のことを何度も頭のなかに思い浮かべながら、可能性を絞り込んでいく必要があったはずです。

現在は、こうしたいわゆる「水平思考パズル」の他にもさまざまな問題を用いて、楽しみながら論理的思考力を鍛えています。では最後に、クラスで取り組んだ問題の中から、もう1問だけご紹介します。「5リットル入る水差し1つと3リットル入る水差し1つを使って、正確に4リットルの水を計るにはどうすればいい？(水はどれだけ使っても構わない。)」ぜひ、水が4リットル入っている最後の状態を想像して、そこから順序よく遡って考えてみてください。

(高木彬)

## 『かず』(6年) 『ユークリッド幾何』 『山の学校ゼミ』(数学)

担当 福西亮馬

『かず6年』では、「グリコ」と呼ばれる石段遊びで、「ぴったりゴールするにはどうすればいいか？」ということを数学的に考察しました。詳細についてはブログの方に譲りますが、この日はいつものように問題を解くだけでなく、問題を自分で設定することにも挑戦してみました。

たとえば、「歩数の種類が3歩と10歩だったら、51段以上のどんな場合でもぴったりゴールできるかどうか？」を知りたいと思い立ちました。それはすぐに「可能」と分かったのですが、そこから少しづつ問題を拡張していきました。とりあえず使える歩数は2種類に制限しておいて、一つは3、もう一つはx(任意)として、そのxの値を変えてみました。結果、 $x=10 \sim 20$ は「可能」で、40以上は「不可能」だということが分かりました。すると、次は自然と「20~40の間はどうなっているか？」ということが気になりました。ここで十分と思ってやめてもよかったですですが、こうなったらむしろ生徒たちの方が続投ムードで、考える姿勢を一向に崩しませんでした。そしてとうとう、 $x=26$ 以上で不可能となるという、一番知りたかった事実が判明しました。その間にも、色々な法則が副産物として見えてきました。他にも自分たちで問題設定を変えてみました。「ぴったりゴールできなかった場合、折り返しを有りとすると？」や、「歩数の種類を3種類に増やすと？」といったことも、最初の予想とは異なる事実が発見できました。そうした取り組みをしめくくって、一言、「面白かった！」と生徒たちが言ってくれたことは何よりでした。

『ユークリッド幾何』では、『原論』の第1巻を読み切ることを目標にしています。今はその中腹あたりにいます。命題47と48の「三平方の定理」とその「逆」まで、あともうひと踏ん張りです。頑張りましょう。また今学期は、『原論』の第5の公準(平行線公準)をトピックとして取り上げ、その際、 $4 \times 4$ 個の点を6本の線分による一筆書きで通る問題を考えました。そして平べったい世界を曲げてみることを紹介し、「当たり前」から「次の当たり前」へと発展してきた数学の歴史の一端にも触れました。数学が先人の作り上げてきたもの、あるいは有機的な知の財産であると感じてもらえば嬉しいです。

『山の学校ゼミ(数学)』では、引き続き『虚数の情緒』(吉田武・東海大学出版会)を読んでいます。今は自然数、整数、有理数の章へと進み、三平方の定理の裾野である「ピタゴラス数」まで差しかかっています。『東海道中膝栗毛』ではないですが、一里塚を一つずつ通り過ぎていくように、同著をハンドブックにしながら、数学の光景を、自分の足(つまり手計算)で眺める旅をしています。ひとまずの目標地点(『膝栗毛』で言えば伊勢神宮?)は、オイラーの公式  $e^{i\theta} = \cos \theta + i \sin \theta$ です。そこまで行って、ふと小休止した時の展望がどのように変わっているかが、今後の楽しみの一つです。

(福西亮馬)

## 『中学理科』

担当 高木彬

秋です。読書をするには良い季節となりました。このクラスの生徒であるM君は最近、小説に夢中です。それも、自分のお小遣いで買って読んでいるのだといいます。クラスが始まる前の休み時間、M君は小説を読んで静かに待っています。彼がまだ小学校4年生の春、ことばのクラスで一緒に芥川龍之介の『トロッコ』を読んだことを懐かしく思い出します。いま中学3年生になり、読書家になってくれていることがうれしく、感慨も一入です。思えば彼とは長い付き合いです。

ある日、M君が読んでいるファンタジー小説の中に登場する科学装置のことが話題になりました。それは魔物(モンスター)を召喚する装置なのだとといいます。ふつうファンタジーの世界では、召喚獣は魔術で呼びだされます。しかし、

この小説の面白いところは、そうしたオカルティックなことを科学的な装置がやってのけるということのようです。そこで、こんな話をしました。

現在、Burton という企業と慶應義塾大学が「True 3D」という立体映像技術を共同開発しています。簡単に言うとこれは、ディスプレイなしに空間中に立体映像を現出させるシステムです。最近はテレビでも映画でも映像が 3D になってきていますが、それはあくまでもモニターやスクリーンといった 2 次元平面上に映しだされた映像です。錯視を利用して 3 次元的に見せかけている。しかしこの「True 3D」は、その名のとおり、本当に 3D なのです。

まず、空気中の酸素分子や窒素分子にレーザービームを照射して酸素イオンや窒素イオンへと電離（イオン化）させます（レーザープレイクダウン）。直後にレーザーの照射を停止することで、イオンは再結合し、平常状態の分子に戻ります。その再結合の際には、強力な光が放たれます（プラズマ発光）。レーザーのオン／オフを切りかえ、このイオン化と再結合を繰り返すことで、空気中に常に光の点が浮かんでいるように見せることができます。「True 3D」は、この光の点の空間座標をコンピュータで制御し、また複数個の光を同時に点灯させることで、立体的な映像を 3 次元空間に浮かべることに成功したのです。2 次元のディスプレイ上で言うところの「ドット」が、3 次元へと拡張したというわけです。世界初の画期的な技術です。

M 君にとっては、ちょうどイオンや電離について中学校で勉強しているところだったので、タイムリーな話題でもありました（といっても、この原理をきちんと理解できるようになるのは、もっと先だとは思います）。 「True 3D」で検索してみると、Burton が出している映像が YouTube にアップされていましたので、M 君と一緒に見ました。面白いですからみなさんも一度ご覧になってみてください。彼は興味津々で、「これが、もっと光の粒が細かくなつて、いろんな色で発光できるようになったら、召喚獣みたいに見えるかも！」と言っていました。

彼が耽読している小説の中の「召喚システム」は、今のところ現実には存在しません。いわゆる“空想科学”です。しかし、どんな科学的発見も、最初は誰かの夢や空想でした。かつては空想だと言われていたことが実現した例も多くあります。だから、「『召喚』って、できるようになるのかな？」という M 君の質問の答えは、「できない」ではありません。「まだできない」なのです。

（※このクラスでは、今回紹介した「質問コーナー」の他に、「入試対策」「自由研究」「実験」にも取り組んでいます。詳しくは前号の『山びこ通信』をご覧ください。）

（高木 彬）

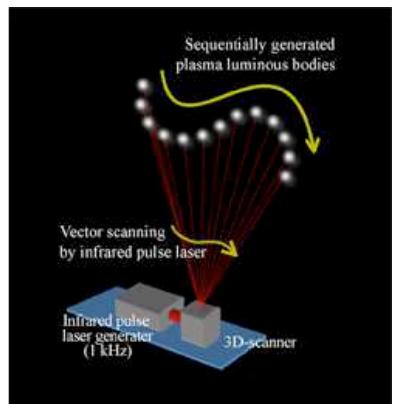
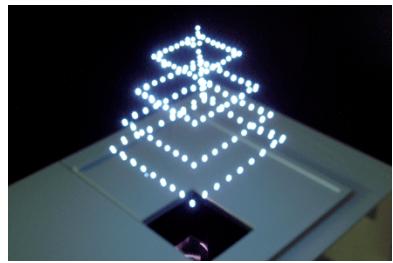
## 『歴史入門』

担当 吉川弘晃

私が山の学校に赴任してから早いものでもう半年が経ちました。春学期からの生徒さんとも教室での質疑応答を繰り返しながらお互いに少しずつですが成長してこれたという感じがします。この授業の趣旨は春学期と変わらず、高校や予備校で扱うような「教科書的歴史」ではなく、様々な視点や価値観から歴史そのものを捉えなおしていこうというものです。従って、この授業の参加者にはできるだけ多様な興味・関心をもってもらうと共に、文系理系を問わず高校生レベルの基礎学力をしっかりと見につけている必要があります。

近年、こうした基礎学力をコツコツ身につけることを軽視する風潮が見られます。「知識偏重型」の大学入試ではなく、「コミュニケーション能力」を考慮に入れた多様な試験形態を導入すべきだと主張する人も少なくありません。確かに知識の詰め込みだけでは中等教育として相応しくないかもしれません。しかしながら、彼らの言う「コミュニケーション能力」について再考しましょう。コミュニケーションとは相手の主張する核心を理解した上で、それに対して自分の経験や知識をもって論理的に意見を述べる作業です。これを潤滑に行うためにはまずは国語力（語彙力・論理力・レトリック力）が必要ですし、論理に肉付けしていくための知識（地理・歴史・物理・化学・生物…）も必要になります。すなわち相手と一定のコミュニケーションを成立させるための土台をある種の「教養」と呼ぶのであれば現在の「知識偏重型」の中等教育は少なくとも「教養」を身につけるツールとしては最適なのではないでしょうか。

このようなことを述べたのは、学問におけるインプットの重要性を再確認しておきたかったからです。この授業では、1 冊の歴史に関する本を参加者であらかじめ読み、私が授業で内容の解説や補足を行いながら、生徒さんに論点や疑問点を出してもらいます。いわば参加者にとってアウトプット中心の授業となるので、コツコツと問題集にあたって暗記するようなインプット作業が退屈に感じられてしまう恐れがあるのです。確かに暗記作業は私にとっても退屈でした。しかし、1789 年に起きたフランス革命を考える上でルネサンス以降だけの知識では不十分と言えるでしょう。人間が未来に展望を抱くとき、その展望の根源となるのはほとんどの場合は過去の歴史的事象です。フランス革命が理想とした共和制のイメージを理解するには古代ギリシャの民主制の歴史を考えねばなりません。さらに同時代に他の地域で何が起こっていたのか、政体や社会形態にどのような違いがあったのかを理解する必要があります。当時のヨーロッパの思想家は専制国家を批判するために同時代の中国を引き合いに出します。そこでは皇帝 1 人のみが自由を享受してその他大勢は隸属に甘んじている、といった具合にです。しかし実際にそうだったのか、どのような偏見が含まれていたのか。こうした批判的な視点をもつたためにも古今東西の基本的な事実を一通り頭に入れておく必要があるわけです。



春学期はイギリス近現代史に関する新書を読み、イギリスの発展がヨーロッパだけでなくアジアをも巻き込む形でいかになされてきたかという、いわば「空間軸」で歴史を考えました。それに対して秋学期はヨーロッパ人の歴史観に関する新書を読み、歴史の「時間軸」そのものを問い合わせていこうと考えております。歴史は実際に起きたことがそれぞれの時代の「色眼鏡」を通じて書き記され、それが無限に書き直される作業であると言えます。ではその「色眼鏡」はどういうように形成されていったのかを考えていきます。インプットの重要性を噛み締めつつも好奇心を何よりも大事にしつつ講師含めて引き続き教室全体が成長していく場にできるよう精進しようと思います。

(吉川弘晃)

## 『中学高校英語』

担当 吉川弘晃

山の学校に講師として赴任してからはや半年、春学期と夏学期をそれぞれ担当してきました。最初のうちと比べて授業の進め方には慣れたものの、生徒さんになかなか理解してもらえない文法事項があつたりするなど、自分の未熟さと格闘する日々が続きます。

私の授業で大事にしているのは春学期と変わらず、「実用性」のある英語です。旅行先の英会話のようなあまり中身の無いコミュニケーションの能力のことではありません。真のコミュニケーションとは相手の主張することを理解したうえで、自分の意見を分かりやすく伝えることです。そしてその手段の1つが文字であり、私たちの思考は文字に影響されているといつても過言ではないでしょう。そのため「読み書き」の訓練を大切にしているのです。

具体的な授業形態についてですが、春学期までは英文法のドリルと単語テストを中心にしていましたが、秋学期からは高校受験を控えた生徒さんのためにも新しい方法を2つ導入しました。

第1がリスニングテストです。リスニングと言えば会話を流してその内容を選択肢で答えさせる問題が普通です。ですが、この授業ではさらに踏み込んで会話文のスクリプトで重要な表現を穴埋めにしてディクテーション（書き取り）を行います。中学生の生徒さんにとってはかなり難しいことを要求していることは理解しております。私自身も大学の英語の授業ではかなり苦戦しました。しかしながら、この作業を通じて生徒さんの英語に関する3つの力を測ることができます。1つ目は、聞いた単語を正しい綴りで書ける力です。「分かった！」と思っていても実際に紙に書こうとしても書けなかったりスペルミスを犯したりすることは多々あります。しかもその単語が中1で習った単語であることも少なくありません。2つ目は聞き取った単語を正しい文法に応じた形で書ける力です。例えば耳では speak と聞こえたとしても主語が he ならば speaks と修正せねばなりません。三単元の s だけではなく時制にも注意する必要があります。そして3つ目は、単語を前置詞との組み合わせで理解できる力です。例えば「run=走る」と覚えていても、The river runs through the city. のように前置詞と一緒にいわば熟語の形で出てきたときに意味が取れないことがあります。いつも生徒さんに注意することですが単語は組み合わせで覚えることが一番です。

第2が和文英訳とその暗唱です。先ほどのディクテーションを行うと多くの場合、半分以上の空欄を正しく答えることができません。そこで正しい綴りや熟語を教えるのですがそれだけでは次の週には生徒さんは習ったことを忘れてしまいます。そこで復習の意味も兼ねてディクテーションの文章を和文英訳の問題に作りなおして生徒さんに解答させ、それをその場で暗唱させます。学校の授業で習った文法範囲についてもそれを和文英訳の形にして同じ作業を行わせます。

語学の習得には理解と反復の両方が欠かせません。春学期では理解に重心を置いた説明に努めてきました。確かにどうしてこの意味になるのかが理解できると語学への興味は一層深まりますが、「実用性」ある語学力としてはそれでは失格です。実際のコミュニケーションは対象を認識して瞬間的に把握せねばなりません。すなわち take part in A と言わわれたら「Aに参加する」と出てこなくてはならないのです。理解と反復、このバランスを授業時間の中でいかに調整していくかが今後の課題です。

(吉川弘晃)

## 『中学英語』(1~2年)・『高校英語』 『英語講読』(『自由論』『ハリー・ポッター』)

担当 浅野直樹

英語を学ぶといえば文法だと思われる方が多いでしょう。しかし一冊の本を読むとなると、最低限の文法を理解しているのは前提として、細かな文法よりもそこで用いられている語をどれだけ知っているかということのほうが大きな要素を占めているように感じます。

J.S.ミル『自由論』から例を出すと、suffer が「苦しむ」ではなく「許す」、observe が「観察する」ではなく「遵守する」、assume が「想定する」というよりは「(誤っていることを) 思い込む」という意味で用いられていました。厳密に読むためにはどの意味なのかということを考える必要が出てきますが、そもそもいくつかの意味があるということを知らないと、なまじ意味が通ってしまうことがあるだけに誤読の元となります。

『ハリー・ポッター』ではイギリス版とアメリカ版、そして日本版の違いから単語に注目することが何度かありました。その中でも sherbet lemon が衝撃的でした。何も考えずに氷菓子を想像していたのですが、アメリカ版では lemon drops、日本版ではレモンキャンディーとなっていました。氷菓子はイギリス英語で sorbet を用いるので sherbet で氷菓子を表すことはないのです。この他にも、医務室がイギリス版では dormitory、アメリカ

版では infirmary となっているなど、いくつかの違いに気づきました。

中学や高校での英語に関しても単語の重要性を強調したいです。例えば to 不定詞の名詞的用法と動名詞との使い分けについては、未来志向の場合は to 不定詞、過去志向の場合は動名詞という説明が一般的ですが、そもそも動詞の意味がわからなければ判断のしようがありません。decide が「決める」だとわかれば to 不定詞だと想像がつきますし、admit が「認める」と知つていれば動名詞だと推測できます。regret が「後悔する」の意味で用いられるなら動名詞、「残念ながら～する」の意味で用いられるなら to 不定詞だという使い分けも同様です。中学2年生の教科書では follow the family's rules という表現が登場しましたが、この follow は「従う、後に続く」という意味であり、厳密に言うと「弁護する」という意味ではありません。日本語の「フォローする」という表現とは若干のズレがあるので注意が必要です。正しい英語の使い方を意識したいです。

(浅野直樹)

## 『将棋道場』

担当 百木 漠



9月の将棋道場では、いつも応援にきてくださっている中務先生の提案を受けて、対局を始める前に、山下先生に昔話「わらしへ長者」の読み聞かせをしてもらいました。「わらしへ長者」は、主人公がわら一本からスタートして、それを様々なものに交換しながら道中を進めていき、最後には大金持ちになって帰ってくるというお話です。

なぜ将棋道場でこの昔話の読み聞かせをしてもらったのかというと、わらを少しずつ価値の高い物に交換していく道程が、将棋の駒を弱いものから強いものに交換していくことで勝ちに近づいていく過程によく似ているからです。例えば、将棋で一番弱い駒は「歩」ですが、これを少し強い駒の「桂馬」や「香車」と交換することで、得をすることができます。さらにそうして手に入れた「桂馬」や「香車」を「銀」や「金」、さらには「飛車」や「角」などの強い駒と交換することができれば、いっそう優勢になります。駒得は局面の有利・不利を判断する際（将棋用語では「大局観」という言葉をよく使います）の大きな指標のひとつになります。

将棋を始めたばかりの子供は、駒の損得をあまり考えず、勢いだけでどんどん指して、結果、大きな駒損をして不利になる、というケースがよくあります。「できるだけ駒損をしないように指しましょう」ということは

普段から子供たちによく言っているのですが、今回、「わらしへ長者」の読み聞かせをしてもらつたうえで、駒の損得の話をすると、子供たちもすつとその内容を理解してくれたようです。さらには、その後の対局をする子供たちの様子も、普段より集中力があつて、熱戦が多く繰り広げられていたような印象を受けました。やはり子供たちへの読み聞かせの影響力はとても強いものがあるのだな、とても感心させられました。

将棋道場を続いていると、だんだん将棋に飽きてきた子供たちが将棋に関係のない遊びを始めたり、対局中に騒いで周りの子に迷惑をかけてしまったり、ということが時々起こってしまうのですが、このように時々は将棋と関係のない事柄を取り入れることで、道場全体のメリハリがつき、子供たちの集中力が高まることがあるのだなと勉強になりました。また、私自身、昔話の朗読を聞くのがとても久しぶりだったのですが、童心に帰つたようで、とても良い経験になりました。山下先生の読み聞かせも流石に上手で、それまで騒がしかった子供たちがすつと静かになって、皆で物語を聞き入っている空気はとても心地よいものだなと感じました。「わらしへ長者」の物語が、僕が小さい頃に読んだものとは少し違った内容だった（いくつかのバージョンがあるようですね）ことも面白い発見でした。

将棋での駒の損得の話に戻れば、例えば、「飛車」と「銀」の交換ならばほとんどの場合、「飛車」を取つたほうが得ですが、これが「角」と「金」の交換ならば、場合によっては「角」を捨てて「金」を取つたほうが得なときもあります。最終的には、すべてはケース・バイ・ケースと言うほかないのですが、序盤・中盤・終盤、それぞれの場面でも駒の価値は変わってきます。例えば、序盤であれば「飛車」や「角」などの大駒の働きが強いですが、終盤では「金」や「銀」などのほうが相手玉を寄せるのに役立つ場合は少なくありません。その時々の判断で、どちらの駒の交換のほうが得なのかを考えられるようになれば、立派なものですね。これから将棋道場に通う子供たちが、駒の損得を頭に入れながら次の指し手を考えるようになってくれれば、きっとそれだけでも1級や2級分は強くなっていることでしょう。（百木 漠）



# 『山の学校ゼミ（社会）』

担当 中島啓勝

マーク・トウェインの有名な言葉にこのようなものがあります。「歴史は繰り返さない、だが韻を踏む」。確かに、全く同じことは二度と起こらないからこそ、私たちは歴史を学んで現代に活かそうとする際にその「韻」を上手く掴み取らなければいけないのでしょう。しかし、そんなことが簡単にできるならば最初から私たちはこんなに悩んだりすることもない訳です。歴史は時に頭韻を踏んできたかと思えば、次は脚韻を踏み、ある時にはわざと破調を選んでくるかのように振る舞います。果たして本当に「韻」などあるのかと疑わしいほどにその流れは複雑怪奇です。また、歴史の語りのどこに句読点を置くかによって、「韻」に対する解釈も変わってくるでしょう。今を生きる私たちはどうしても自分たちの立っている現在を特別な時代だと思いがちです。「今、ここ」に句点を置いて、これまでの歴史がそこに向けて完成されたパッケージかのように考えて「韻」を読みきったと勘違いしてしまいます。きっと未来の人々は、私たちが生きる「今、ここ」を「昔々、ある所に」という形で、句点ではなく単なる一つの読点として読むことになるでしょう。そしてまた自分たちの生きる時代が確固とした句点だと思い込む……。歴史は繰り返しませんが、歴史の読み違いをする人間の浅はかさはきっと変わらず繰り返してきたのではないでしょか。

「山の学校ゼミ（社会）」では今までの学期同様、前半は国際政治情勢やグローバル経済についてのニュース記事の紹介、後半は課題図書の講読という形で、社会人の生徒さん三名と一緒に楽しく授業を行っています。混迷する中東情勢や、新興国の経済成長にかかる暗雲など、今後も予断を許さないようなニュースが続いており、様々な視点を交えながらざっくばらんに議論しています。特に、東南アジアやアフリカの話題などは、生徒の皆さんには興味が持ちにくく退屈な面もあるかと思いつつも、それでも今後間違いなく人口増加による経済成長、いわゆる「人口ボーナス」を受け取る地域として、敢えてなるべく取り上げるようにしています。先日は、マレーシアやインドネシアが実はイスラム圏の中でアラビア半島や北アフリカの国々に匹敵するほどの存在感を持ち始めているという記事を紹介しました。2013年の現時点で既にカトリック教徒よりも多い人口を抱え、今後も増え続けることは確実なイスラム教徒の人々。その中心が今後は私たちに身近なアジアに移っていくかも知れないと思って、生徒の皆さんも少なからず驚かれていたようでした。

後半の講読では、以前から「日本の近代史についてもう一度ちゃんと学んでみたい」という要望に応えるため、課題図書を二つ用意しました。一冊は山川出版社が学生以外の一般読者を想定して刊行している『もういちど読む山川日本近代史』（山川出版社）です。高校教科書よりも一般書的な記述になっているだけでなく、日本史学の近年の動向についてもかなり詳しく解説されており、まさに先ほども書いた歴史にどのように句読点を入れるかが生々しく変わっていっていることが見て取れます。更に、これを下敷きにしながらもう一冊、こちらも話題になった本を読み進めています。加藤陽子の『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』（朝日出版社）です。こちらは著者がこの本のために高校生に行った講義を再構成したものになっており、平易な文章でとても読みやすいのですが、それでいながら最新の研究成果が惜しげもなく紹介されています。やはり日本の近現代というテーマは生徒の皆さんも強い関心をお持ちなので、この二冊を併用しながらできるだけ公平で多角的な視点から議論することを心がけています。

マーク・トウェインはそう言えば、歴史についてこんな言葉も残しています。「すべての歴史を書くあのインクだって液体の偏見に過ぎない」。これからもこの警句を胸に、しかしそれでも歴史が踏む「韻」を感じ取る努力を皆さんと一緒にしていくつもりです。

（中島啓勝）

# 『イタリア語講読』

担当 柱本元彦

『ニュー・シネマ・パラダイス』で有名な（ほとんど枕詞ですね）ジュゼッペ・トルナトーレ監督の＜小説＞La migliore offerta を引きつづき読んでいます（あともう少しで終わります）。これを映画化した作品『鑑定士と顔のない依頼人』の日本公開が12月に決定し、タイミング良くこの＜小説＞の邦訳が、京都の人文書院から出版されることになりました。講師にとってはまさに一石二鳥と申しますか、受講生からの指摘などで誤訳にも気づき、一石三鳥分の値打ちはありました。来月11月には書店に並ぶでしょう。タイトルはもちろん映画と同じ『鑑定士と顔のない依頼人』になります。こういったことは重なるもので、同じく11月にもう一冊、一年半ほど前にこの講読で使用したことが縁になって、本が出ます。フェデリコ・ゼーリの『わたしの好きなクリスマスの絵』という小さな本、大人の絵本のようですが、美術史家ゼーリのいわばエッセンスのような趣きもあります。クリスマスの贈り物として素敵なお選択ではないでしょうか（と宣伝しておきます）。ところで『鑑定士と……』の主人公ヴァージルはどこなくゼーリ先生を彷彿とさせます。作品のキー・フレーズ、ヴァージルの言う「どんな贋作にも必ずどこか真実が秘められている」という言葉には、大鑑定家ゼーリも賛成するでしょう。いや、記憶違いでなければどこかでゼーリも同様の発言をしていました。いやいや、これはただ単に、西洋人の好きそうなく殺し文句＞のひとつかもしれません。思い出しました……何か月か前に読んだスペイン人作家サフォンの『天使のゲーム』で、小説のミソを問われた主人公の作家は、「虚構のなかの真実」などと応えて言い逃れをしておりまし

た。<真実>は、虚構に成長する種子としての出来事や感情かもしれません、虚構を思い描く情熱自体のことかもしれません。ちなみに『天使のゲーム』は、ゴシックロマン仕立てのダシール・ハメットにドストエフスキイをぶちこんだような感触のある小説で、お勧めです。

(柱本元彦)

## 『ロシア語講読』

担当 山下大吾

今学期の当クラスでは、ロシア最大の詩人であるプーシキンの代表的な抒情詩を中心に取り組んでおります。受講生は引き続き T さんお一方、木漏れ日が柔らかに差し込む、昼下がりの「離れ」の中での授業です。

これまでにプーシキンの詩人としての出自や思い、さらには使命感が強く表れている詩を主に読み進めてきました。旧約の預言者イザヤの召命に範をとりつつ、神に選ばれ（てしまつ）た者のみの有する、凄惨とも言える自己体験を赤裸々に綴る『預言者』。詩人の極めて対照的な姿が第三者の立場から眺められ、ひとたび神の声に触れた彼の躍動し疾駆する姿が、我々読者の目の前を通り過ぎ、人気なき岸辺へ、森の中へと走り去る『詩人』。その詩的世界の本質は、かつてプロスペル・メリメが「せいぜいラテン語にならば訳せよう」といみじくも評した、翻訳という手段を峻拒するプーシキン自身のロシア語を読むことによって初めて得られます。そのような詩を味読する楽しみは、何事にも代えられない貴重なものです。

前学期まで取り組んでいたトゥルグーネフの『散文詩』は、その詩的価値はさておき、タイトルが示すように散文による作品です。彼自身もその文体に絶対の自信を抱いていたからこそ、このスタイルで記したに違いありません。T さんは韻律や押韻など、韻文ならではの制約や特有の表現に当初不安を抱かれた由ですが、現在ではアクセントの違いによる形態の差異が覚えやすい点など、むしろその長所に注目しているようです。今後は引き続きプーシキンの詩を中心に読み進め、合間にレールモントフやチュッチャフの同傾向の詩を取り上げる予定です。

(山下大吾)

## 『漢文入門』

担当 木村亮太

漢文入門クラスの秋学期は『韓非子』和氏篇から再開しました。その後、いったん『史記』廉頗藺相如列伝を「刎頸の交わり」まで読んで、いまはまた『韓非子』姦劫弑臣篇に戻ってきました。

今学期はベテラン・I さんと私の 1 対 1 です。授業は、まず I さんが一段落ほどに区切った文章を訓読し、つづいて解釈を交えながらの現代日本語訳（ポイントごとに私がチャチャを入れます）、ここで選手交替、今度は私が訓読をしながら、一句ごとの意味を確認していき、最後に残った疑問点の検討、ということの繰り返しで進んでいきます。思えば、2 年前に初めて I さんとお会いしたときから、ずっと同じことの繰り返しです。ですが、その間に I さんがどんどん成長していたように、私の役割も変わってきていたように思います。

当初は、I さんや他の受講生の方がうまく読めなかつたところ、うまく意味が取れなかつたところを、（ちょっと嫌な言い方ですが）「直す」というのが私の主な役割だったような気がします。ところが、最近はその必要がほとんどなくなっていました。I さんがスラスラと読んでしまうからです。なにか引っ掛かりがないとアッという間に授業が進んでしまって、それでは I さんにとっても歯ごたえがないでしょう。

いつの頃からか、私は「I さんが絶対に知らないこと」を言おうと努めていたように思います。ひとりで予習しながら、「さすがに思いつかないだろう」ということばかり考えるのです。マニアックな内容になることもあります。それで授業に行きます。I さんの反応はどうでしょう。こんな話、喜んでくれたでしょうか。まるで、こっちが生徒のようです。

表面をなぞるだけだった漢文入門クラスのテキストに、いつの間にか、ところどころ穴を掘ったあとができるようになりました。ことしもあと 2 ヶ月、最後まで頑張りましょう！

(木村亮太)

## 『ラテン語初級文法』

## 『ラテン語初級講読』(A・B・C)

担当 山下大吾

今学期は「初級文法」クラスが、お一方の受講生、A さんを迎えて開講されました。教科書として岩波書店刊『ラテン語初步 改訂版』を用い、来学期を加え全 24 回で終える予定です。今のところ順調に過程が進んでおり、もうすぐラテン語学習での第一関門とも言える第三変化名詞に入ります。

講読クラスは3クラスです。AクラスとCクラスでは前学期に引き続き、それぞれキケローの『老年について』と『スキピオの夢』を読み進めております。Bクラスでは今学期から、アリストテレスの『詩学』と並んで詩的創作論の模範として絶えず顧みられている、ホラティウスの『詩論』に新たに取り組んでおります。

Aクラスには、開講以来受講されているAさんとHさんに加え、今学期は新たに大学生であるTさんが参加されました。フレッシュなメンバーが加わり、文字通り若返った雰囲気の中で読む老年論の古典。キケローの記す、御年84歳の大カトーの若々しさ、雄々しさが、より一層際立って浮かび上がってくるように感じられます。

Cクラスは今のところCiさんとのマンツーマンの授業です。天体の動きから奏でられる、小スキピオの耳を満たす音楽を巡る場面の叙述は、優に一篇の詩に等しい内容と質とを備えています。同作品を読了次第、引き続きキケローの『義務について』を講読の予定です。

BクラスはCaさんとMさんお二方との授業です。初級クラスでは初となる韻文作品となりましたが、Mさんが韻律に興味を抱かれていることもあり、これまで特に問題なく読み進められております。またお二方ともギリシア語に通じているため話題も豊富、楽しみは尽きません。数ある古典の中でも格言の宝庫とも評すべきホラティウスの『詩論』。そのテクストを、普段見慣れた一輪挿しやトルソーの形ではなく、幅と流れのある本来の状態で読むというまたとない時間が毎週展開されております。

(山下大吾)

## 『ギリシャ語初級講読』(A・B・C) 『ギリシャ語中級講読』

担当 広川直幸

ギリシャ語初級講読 Aではソポクレースの『オイディプース王』を今学期から読み始めた。テキストはLloyd-JonesとWilson校訂のOCTを基本にしてJebbとDaweのテキストと註釈を併せて用いている。古典を読むということは多かれ少なかれ本文批判に関わるということなので、その訓練として異説(varia lectio)や学者の推定読み(conjectura)を注意深く検討しながら少しづつ読み進めている。

ギリシャ語初級講読 Bでは前学期にプラトーンの『饗宴』を読み終えたので、今学期からプラトーンの『パидーン』を読み始めた。テキストと註釈はBurnetとRoweを併用している。二週に一回の授業で今のところ一度に2ページ程度のペースで進んでいる。前学期までの『饗宴』は一回に3ページ程度進むことができたので、内容は難しいけれども、それを目指して少しづつペースを上げて行こうと考えている。

ギリシャ語初級講読 Cでは『新約』の「マルコによる福音書」を読んでいる。昨年秋に出版直後のNA28をドイツ聖書協会から取り寄せて読み始めてから一年が経った。この原稿を書いていたる時点で第14章の終わりまで進んだので、残り数回の授業でめでたく読了である。この授業には高校生が参加している。高校生がネストレ版で「マルコ伝」を通読するのは快挙である。おめでとう。

ギリシャ語中級講読は『イーリアス』第6歌を一回に30行程度のペースで読んできた。もうすぐ読み終わるので、その後は『イーリアス』第18歌を読む。テキストはM.L.West校訂のトイプナー版を、註釈は2010年にイタリアで出版されたG.Cerri, *Omero, Iliade, Libro XVIII: Lo Scudo di Achille*を用いる。

(広川直幸)

## 『ラテン語初級』『ラテン語中級』 『ラテン語中級講読』

担当 広川直幸

今学期から開講したラテン語初級ではHans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana*を用いて一からラテン語を学んでいる。この教科書の本質は文法訳読方式のラテン語学習との完全なる決別にあるので、訳すという作業は行わず、読んだテキストについてラテン語で質問をしラテン語で答えてもらって理解度を確認するというやり方で進めている。週一回の授業では練習に十分な時間を充てることができないので、各自で毎日少しづつテキストを読み返してラテン語で自問自答をする練習をしてもらえばと思う。

ラテン語中級ではHans H. Ørberg, *Lingua Latina II: Roma aeterna*を用いて講読と作文を行っている。難関であったCAPITVLVM XLVIII(第48課)のリーウィウスの第二次ポエニ戦争の記述をようやく読み終えることができた。今は第49課に入り、ネポースの『外国名将伝』中の「ハンニバル」を読んでいる。

ラテン語中級講読では引き続きフランチェスコ・ペトラルカの『わが秘密』を読んでいる。そろそろ第一巻の終わりが見えてきた。『わが秘密』は我が身の不幸に苦悩するフランチスクス(フランチェスコ)とアウグスティヌスの対話からなっている。フランチスクスに対してアウグスティヌスが提示する不幸からの脱出法が仏教の四聖諦によく似ていることや、仏教の死隨念のような瞑想法が説かれていることを不思議だなと思いながら読んできた。『わが秘密』は第一巻でひとまず終了として、次はPeter Dronke, *Nine Medieval Latin Plays*を用いて中世ラテン語劇を読む。

(広川直幸)

～『Ipse dixit. 子曰く』の続き(2ページ目より)～

学校や家庭で知識の習得に励むことは尊いことだ。しかし、それを生かす議論の仕方をわきまえ、試行錯誤を繰り返しながら自分の言論を磨くこともまた、学校教育の中で十分経験すべきことである。例えば、ある論点について、賛成のレポートを書いた生徒には反対の立場のレポートも書かせる、あるいは、別の視点からのレポートを書かせる、というのが西洋教育の伝統である（その源流はギリシャ・ローマに遡る）。もし学校でこれをやらないのであれば、自分でやればよい。読書をしながら気になる論点を見つけ、異なる立場の意見も含めて多読と精読を繰り返す。それをふまえて書き上げたレポートは、後日自分で読み返して批判するもよし、できれば他者に添削してもらえばなおよし（恭しくお願ひいたら、学校の先生は必ずコメントして下さるだろう）。

明治の先人はヨーロッパから多くの土産物を持ち帰ったが、一番大事なものを持ち帰らなかつた。それは、洋魂、すなわちギリシャ・ローマの古典（＝西洋の学問と文化を生み出した母体）であり、言論を重んじる教育の伝統である。明治開国当初、「和魂洋才」の呼びかけのもと、「洋魂」の研究は相対的におざりにされたまま百五十年が経つ。「和魂」は江戸時代のまま停まっている。それでよい、という人もいる。それではいけない、という人もいる。だが、どこから手をつければよいのか。私は、上で述べたように、「和魂」を再確認し、「和魂」の上に人類の「才」を生かす道を探るためにも、今こそ「洋魂」を根本から（＝古典から）学ぶべきときが来ていると考える。我々が自己を知る—善いところも悪いところも—には、信頼に足る確かな「鏡」が必要なのだから。

(山の学校代表・山下太郎)



## あなたもラテン語を学びませんか？

このたびラテン語の「わかりやすい」教科書を書きました（ベレ出版）。扱った例文は500、羅文和訳の練習問題は200。それぞれのラテン語に語彙と解説、練習問題には解答もつけました。意外に思われるかも知れませんが、ラテン語は日本人にとって親しみの持てる言語です（発音はローマ字読みでOKです）。英語の基本を一通り学んだ人なら誰でも本書は通読できるでしょう。学んでどんなメリットがあるかは、学んでからのお楽しみです。

この教科書を使ったラテン語の講習会も、東京（代々木研修室）と京都（キャンパスプラザ京都）で定期的に開催しています。山の学校のいわば出張講習会です。日程と内容の詳細は、私のウェブサイトでご確認ください。皆様のご参加をお待ちしています。

→『山下太郎のラテン語入門』<http://www.kitashirakawa.jp/taro/>

## 目次

<卷頭文>	
・『Ipse dixit. 子曰く』	…p1~2,16
<小学生クラス>	
・『しぜん』(A・B)	…p3
・『かいが』(A・B)	…p4
・『つくる』(A・B)	…p5
・『ことば2年』	…p6
・『ことば4年』	…p6
・『ことば5年』	…p6
・『ことば6年』	…p7
・『かず1~5年』	…p7
・『かず2年』	…p8
・『かず5年』(A・B)	…p8
・『かず6年』	…p9

<中高生クラス>	
・『中学英語1~2年』	…p11
・『中学高校英語』	…p11
・『高校英語』	…p11
・『中学数学』	…p8
・『高校数学』	…p8
・『ユークリッド幾何』	…p9
・『中学理科』	…p9
・『ロボット工作』	…p5
・『調査研究入門』	…p6
・『歴史入門』	…p10
<イベント>	
・『将棋道場』	…p12

<一般クラス>	
・『英語講読』(自由論)	…p11
・『英語講読』(ハリー・ポッター)	…p11
・『山の学校ゼミ(社会)』	…p13
・『山の学校ゼミ(数学)』	…p9
・『イタリア語講読』	…p13
・『ロシア語講読』	…p14
・『漢文入門』	…p14
・『ラテン語初級文法』	…p14
・『ラテン語初級講読』(A~C)	…p14
・『ラテン語初級・中級』	…p15
・『ラテン語中級講読』	…p15
・『ギリシャ語初級講読』(A~C)	…p15
・『ギリシャ語中級講読』	…p15

—本誌を手にとって下さった方へ

山の学校は、小学生から大人を対象とした新しい学びの場です。  
"Disce libens. (楽しく学べ)" がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです（春学期は6月、秋学期は11月、冬学期は2月）。ホームページでも、クラスの様子やイベント（毎月開催・無料）の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕がない！もし、そうした気持ちを本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで

TEL: 075-781-3215



FAX: 075-781-6073

E-mail: taro@kitashirakawa.jp

<http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko>